

## 信貴山縁起再考

《キーワード》信貴山 縁起絵巻 命蓮 説話画

百橋明穂

本論文は『日本の絵巻物』完全復刻シリーズ『国宝信貴山縁起繪』（丸善 二〇〇二年）に付けられた解説である。高価な複製本のため、目にして頂ける機会が少ないので、ここに再録した。関係する図版などは『信貴山縁起』（日本絵巻大成 四 中央公論社 一九七七年）や『信貴山縁起』（新修日本絵巻物全集 三 角川書店 一九七六年）などを参照されたい。

### はじめに

現在奈良県生駒郡平郡にある信貴山朝護孫子寺に伝わる三巻の絵巻「信貴山縁起」は九世紀末から一〇世紀前半にかけて、この信貴山に止住してこの寺の興隆に尽くし、実在した「命蓮」という修行僧にまつわる逸話を描いた絵巻物である。説話の内容としては、命蓮は、時に飛鉢の法力を顕して庶民を驚愕させ、感化した。また時に剣の護法でもって時の天皇の病を癒した。さらに信濃から上京した姉との再会はそのほのとした情愛に満ち、長年の修行の労苦が偲

ばれる物語である。命蓮にまつわるこのような三つの逸話を、三巻にわたる長大な巻物に繰り広げられるダイナミックな場面の連続は、見る者をして息つく暇を与えない。平安時代後期に盛行し、今に伝わる多くの絵巻の中でも、「源氏物語絵巻」「伴大納言絵詞」等と列んで三大絵巻に数えられるが、その最高傑作とも賞されている。しかしながらこの絵巻ほど不明なことの多い絵巻も滅多にない。眼前に迫る、素晴らしい躍動感にあふれる、分かりやすい説話描写と、一方でなかなか見えてこない、その不可解な制作背景や制作環境など、不思議な魅力に富んでいる。

本絵巻の主人公である命蓮の歴史上の実在を伝える史料は多くはない。同時代の文書として残る「信貴山資財寶物帳」<sup>1</sup>がある。これは命蓮自身によって書かれ、承平七年（九三七）に官に提出された、当時の信貴山の現状を伝えるいわば公文書である。その巻末に記された命蓮自身の申し立てによれば、命蓮は寛平年中（八八九―八九七）に豆も麦も区別がつかないくらいの幼少の頃に、信貴山に登り、庵室を作って十二年の山中籠山の修行に入ったという。その

時には既に信貴山には方丈円堂が一宇あって、その中に毘沙門天一  
軀があったという。その後訪れる人もいないながら、ひたすらこの  
山に籠もって六十有余歳に至ったという。しかしその間に、本堂を  
初め、宝殿、尊像、宝物、房舎などを造営した。また十方の施主か  
ら田畑の寄進を受けたが十分でないので、常燈、修理にも事欠く有  
様で、鎮守山王の諸神を勧請して、その威光でもって、伽藍を護持  
して、仏道を成じ、万民に利することを願うとする。これによって  
十世紀前半の実在が確かめられるが、命蓮はけっして信貴山の開祖  
ではないことがわかる。いわば中興の祖である。また、山王の諸神  
を勧請していることや、所持していた経文には法華経、大般若経の  
ほか、真言経などもあり、本来は天台系の沙弥と称する山林修行者  
であるが、修験道などの修法にも通じていたのであろう。延喜年中  
(九〇一―九二二)に檜皮茸の三間の御堂を建立し、中に金剛界成  
身会五仏などを安置しており、その後延長年中(九二二―九三〇)  
にはさらに釈迦、文殊普賢像を加えており、その雑修的な性格が読  
みとれる。もう一つの史料は、命蓮の活躍を伝える記録で、平安末  
期の編纂になる「扶桑略記」<sup>12)</sup>である。時の天皇、延喜のみかど、  
すなわち醍醐天皇が延長八年(九三〇)病に付いた時、八月十九日  
修験の噂の高かった河内国志貴山寺の沙弥命蓮を宮中左兵衛陣に召  
し、病氣平癒のために御前にて加持を行わせたというものである。  
しかし結果は、加持の甲斐もなく、その後醍醐天皇の病は癒えず、  
退位の後、九月二十九日に崩御された。修験の行者(沙弥)として  
の評判がすでに宮中にも聞こえていたこと、また信貴山を河内国と  
し、命蓮自身が宮中に出向いて加持を行っていること、さらに結果

は評判とは異なり、効験はなかったことなど、本当にこれが事実と  
すれば、命蓮について格別の法力や魅力ある逸話の種を宿している  
ようには見えない。以上が命蓮の歴史上の真実を伝えるわずかな史  
料である。

しかしながら命蓮にまつわる説話は、いつの間にか史実を離れ、  
やがて自己増殖を始める。その文学的飛躍の過程で、文学と美術と  
が競い合って見事に芸術的結実を遂げたのが、この信貴山縁起絵巻  
である。命蓮説話の飛躍、発展の過程を追うことはかなり困難であ  
るが、命蓮実在の年代に近いものとして、「僧妙達蘇生注記」<sup>3)</sup>があ  
る。これは天治二年(一一二五)の書写奥書があるが、この書その  
ものは天曆九年(九九五)頃に書かれたとされ、命蓮の死後程なく  
の頃の説話を伝える。それによれば河内国深貴山明蓮師は三十年間  
法華経を誦誦し、よって兜率天内院にて法華経を講ずべしとい  
う。すでに法華経の行者としての明蓮(命蓮)が知られていたことにな  
る。確かに「信貴山寺資財寶物帳」には法華経が記載されており、  
天台系の山林行者であることは間違いない。しかしここにはほとん  
ど逸話伝説的な要素は見出されない。また法華経の行者としての命  
蓮は法隆寺に住した僧としての説話もある。すなわち比叡山横川首  
楞嚴院の沙門鎮源によって、長久四年(一〇四三)に成立したとい  
う「本朝法華験記」<sup>4)</sup>第八十には、「七卷持経者明蓮法師」として記  
載される。これではまったく法華行者としての明蓮(命蓮)の姿は  
あるが、信貴山ではなく、法隆寺である。たしかに信貴山と法隆寺  
では大変近い距離にはあり、交流があっても不思議ではないが、信  
貴山に籠もって修行したという命蓮自身の申し立てとは大いに異な

る。少なくとも本絵巻の内容に接近し、その制作以前に遡ると思われる命蓮説話は、成立年代について議論があるけれども一応十一世紀末になったとされる「今昔物語」<sup>5)</sup>において見ることが出来る。「修行僧明練始建信貴山語」<sup>6)</sup>と題された説話を収録している。それによれば明練（命蓮）は常陸国の人となっており、靈験のある諸国を巡って大和国に至り、信貴山に登ったという。山中の岩間から石の櫃に入った多聞天（毘沙門天）を発見して、以後傍らに庵を造って住し、毘沙門堂を大和・河内の人の協力を得て建立した。多くの人を訪れて布施を行い、人が来ないときには、鉢を飛ばして托鉢して食を得、瓶を遣りて水を得、不足することがなかったという。醍醐天皇病氣平癒の加持のことや、仏道修行のことはなく、毘沙門堂を草創した逸話を中心であるが、ここで問題となる飛鉢の説話が初めて登場する。歴史の記録と説話文学との間が次第に乖離してゆく端緒を見ることが出来る。

やがて年代を追ってゆくと、突如として、我々の目前に飛躍的に粉飾された説話を基に、視覚的に具体化された信貴山縁起絵巻が迫ってくる。現在三巻からなる信貴山縁起絵巻は、第一巻を山崎長者の巻、第二巻を延喜加持の巻、第三巻を尼公の巻という。もとよりこれが当初からの原題であったということは確定できない。ことに第一巻の山崎長者の巻については、従来より飛倉の巻と通称されている。内題はなく、現在三巻の外題として付箋されている近世のものと考えられる題箋にかくあるのみである。各巻とも一紙は縦三一・七で、横幅は若干のばらつきはあるが、約五八字から五九字前後である。やや大判の紙を継いでいる。第一巻は一六紙、第二巻は詞

書を含めて二四紙、第三巻は二六紙である。まず三巻を列べたとき、不思議なのは、第一巻には詞書が全くないということ、つまり絵のみが連続すること。また第一巻はそのためか、長さが異常に短いということであろう。第二巻、第三巻はいずれもまず巻頭に詞書があり、絵が始まる。途中にも詞書があり、また絵が続く。このように前半部と後半部とに分かれる、二段構成となっている。内容的には各巻は相互に独立しており、一巻ずつはまとまりがあつて、三巻仕立てであつたとみてよい。ただ後に詳しく論ずるが、第一巻後半の詞書が第二巻の最初にあるという問題が残る。これら現存する三巻の内容及び詞書に合致するテクストとして、「宇治拾遺物語」と「古本説話集」<sup>7)</sup>があげられる。なかでも「宇治拾遺物語」より以前で、平安時代末期の成立とされる「古本説話集」<sup>8)</sup>がもっとも近い関係にあるとされる。「古本説話集」に収められた「信濃国聖事」<sup>9)</sup>の説話物語である。それによつて絵巻の、ことに詞書が見あたらぬ第一巻の内容も含めて、理解することができる。絵巻三巻の内容は、ほぼ説話集の内容に網羅されている。残された詞書と説話集との比較対照は命蓮説話そのものの発展過程を知るばかりでなく、説話の絵画化の秘密や絵巻制作の環境をも垣間見ることが出来る。しかしながら説話文学研究の現状<sup>10)</sup>では、絵巻の詞書と説話集との間には直接的な本末関係はないということである。当時すでに命蓮の説話が広く行われていたとし、口承的性格の強い説話集と絵画化のための柔軟性を備えた詞書との質的な相違があるとされる。歴史の真実を離れ、説話文学の制約を乗り越えて、大きく飛躍した、絵巻ならではのドラマが展開する。

## 一、飛倉の巻

さて、現状の絵巻を見ると、第一巻は冒頭から大混乱の中に幕を開ける。いきなり板扉に囲まれ、中庭には瓦屋根の校倉をもつ富裕な館の場面が描かれる。多くの下女下男が働いており、裕福な地方豪族の館である。場面は庇で供養を受けていた赤鼻の僧と小僧が立ち上がって中庭の倉を指してわめき、また中庭では下女や雑司達が右往左往の大混乱に陥っている。目を見張り、悲鳴を上げ、手をかざして喚き立てる。驚天動地の出来事が発生した。中庭の校倉の扉から金の鉢が転げ出て、ゆさゆさと米倉を空中に持ち上げ始めたのである。瓦がずれ落ち軋みの音を立てている。やがて倉は宙に舞い上がり、空の彼方に飛行していったのである。家の主をはじめ、立ち騒ぐ下部達は空中を飛行する校倉を追いかけんと一斉に裏木戸から飛び出した。赤子をおんぶした女から老女、老僧までも、裸足で衣はだけるのもかまわず追いかけた。主は馬の鞍に飛び移り、僧侶は揉み手をし、金鉢が空中に持ち上げて、目の前の大きな水辺の上を飛んでゆく倉を追いかける。倉の裏手には太い柱を立て、貫を渡してくさびを刺して、油を絞る長木と呼ばれる装置や、大きな竈が見える。網代戸のそばには瓜のぶら下がる棚も見える。倉は水辺の上を越え、空の彼方へと消えていった。岸を行く旅人も空飛ぶ倉に仰天して振り返る。やがて倉は霞の向こう紅葉や楓の美しい山を越えて飛んでゆく。必死に追いかける主とその従者達は次第に山中に入ってゆく。立派な朱の飾りをした馬にまたがって、烏帽子、狩衣の主もどこか不安そうで、従う従者も息が切れたり、草履の鼻緒

が切れたり、手鼻をかんだりと忙しい。

やがて場面は霞の彼方へと一旦消えてゆく。藍を刷いた空に向かって紅葉に彩られた山の稜線をたどると、山中の庵の端が次第に霞の中から浮かび上がってくる。まさに霧の中からフェードインする映画のシーンを見る思いがする。高欄をめぐらした立派な命蓮の住房の簀子縁には命蓮と、その傍らには金の鉢が、すでに到着した主と従者の一行と対面している。主は階から身を乗り出して、命蓮に返還を迫る。また外の庭にいる従者達はしきりに左を指さして命蓮の返事をうかがっている。命蓮は金鉢の方を指さして平然として、いう。倉は返せぬ。信貴山にこういう校倉がなかったので、是非必要。ただし中の米はお返ししよう。従者達の指さす、命蓮の住房の山向こうには、米のいっぱい入った瓦屋根の校倉がすでに着陸して霞の上に屋根をのぞかせている。そこで、場面は転換する。説話集には主からの米の寄進の申し出があり、命蓮とのやりとりがあるが、詞書や絵では一切ない。倉の寄進と米の返還にしぶしぶ承知した主も、いかにして米を返すのか不思議でならない。校倉の前では、米の寄進は断り、米はすべて返すといつて、命蓮が指揮をしている。従者の一人に倉から米一俵を取り出させ、金鉢に乗せさせる。何事かといぶかしがる従者達の怪訝な表情がおもしろい。やがてどうなることかと見守るなかで、一俵の米を乗せた金鉢は空中に舞い上がる。すると倉の中の米俵が一斉に引き続いて飛び出したのである。雁の続くように、また群雀の飛びたるように。米俵の列は倉から飛び出し、山中を飛び越え、また来た方へと一気に飛んでいった。山中の鹿もびっくりして振り向いている。遠く霞んだ彼方へと飛び去

り、また場面は消えていった。フェードアウトである。

場面は唐突にまた最初の場面と同じ、富裕な長者の館に至る。途中の時間は一気に省略される。能楽の道行きに近い。板塀に囲まれた館の中では先ほどの喧噪が嘘のように、静かな営みに戻っていた。先ほどの底の間では、老僧が傍らに経机を置いて、童女に読み書きでも教えているのである。そこへ一足先に報告に駆け下りた下男が信貴山でのことの次第を告げているのであろう。老僧はあまりの信じられない話に一向に耳を傾ける様子もない。ところが、板塀を挟んだ中庭では倉のあったもとの場所に、米俵が地響きとともに次々と舞い降りて来るではないか。立ち働いていた下女達もまたまた恐怖の表情に強ばっている。庭先にいた瓜を摘む下女も身をすくめている。冒頭の場面と同じように、油取りの長木と大きなゆで釜が見える。裏の網代戸と板塀を越えて米俵が雁の舞い降りるように空中から続く。場面は何事もなかったかのように幕を引く。この第一巻は山崎長者の巻と呼ばれている。しかしその呼称は必ずしも古いものではない。説話集にもこの長者を特定させることは一切記されていない。古本説話集では「山ざとに、げすに人として、いみじきとくにんありけり」とあるのみである。さらに宇治拾遺物語では「此山のふもとに」とあって、信貴山の近くを想定させる。ところが、近世以降、山崎長者として、すなわち山城国、現在の京都府大山崎町の長者ということになっている。この根拠は絵巻に描かれた油を絞る長木と呼ばれる装置と、大きなゆで釜である。平安時代には山崎の地は、京都盆地から木津川、桂川、宇治川の三つの河が淀川として合流する地点にあり、また天王山と男山八幡（石清水）の

山が迫る、いわば流通の要として栄え、また当時山崎の商人は油売りでもって全国にその商権を独占して裕福な富みを形成していた。山崎の地は奈良時代の行基が河に架橋し、交通、流通の便を確保し、行基四十九院の一つ、山崎院を興隆させたところとして繁栄を誇っていた。そのことにより、ここに描かれた長者は山崎の油売りの長者と考えられたのである。あながち間違いとも言えない。おそらく絵師は山崎をイメージして描いたとしてもおかしくない。またこの絵巻を鑑賞した当時の人もまた山崎の地を連想したかもしれない。飛鉢の先を山城国大山崎の長者とした最も古い文献は十三世紀後半に編集された天台系図像を集めた「阿婆縛抄」の「諸寺略記」<sup>87</sup>である。天台宗側から見た縁起を伝えており、この絵巻制作の背景を盤をうかがわせる。確かに絵巻では飛び立った倉は裏木戸を出ると、大きな水辺の上を飛んでゆく。これを淀川の流れと見れば、山崎といえる。また山崎には東大寺の莊園が相当あったことが知られる。命蓮の東大寺との関係を示唆するものとして重要なファクターと言える。しかし説話集で云うような近い距離ではない。信貴山の立場から見れば、直線距離にして相当遠い山崎より、むしろ信貴山の麓であれば、竜田川が大和川に合流する今で云えば王寺や斑鳩あたりの方が自然である。また信貴山の所在を河内国とするのも、同じ大和川下流で生駒山系の反対側に河内国志紀（志貴）郡があり、ここにはかつて律令制下に河内国府がおかれ、水運を利用した交通の要路であった。河内国志紀郡（評）は古代から渡来系の人々が住み<sup>88</sup> 仏教文化の先進地として、多くの事蹟を伝えている。よって正確な地理的・行政的な知識を欠く立場の人にとっては、信貴山を河内

国にあるとしてもあながち無理ではない。(地図参照) 絵巻に描かれた風景が、歴史の真実の反映にちがいないという思いこみこそ、深読みという危険もあり、絵はあくまで架空の絵空事ということも一方で考えておかねばならない。歴史資料として、絵巻を読み解くという試みは重要であるが、美術としての真実、すなわち作品の構造解析も忘れてはならない。今は山崎長者の巻とされるが、むしろ飛倉の巻のほうが、素朴であり、当初の原題であるかもしれない。

そして最後に二五・二の短い第十六紙がある。なだらかな山中の景を描いているが、やや不自然な点がある。巻首の冒頭の場面にある館は水辺の近くではあるが、近くに山があるようには表されていない。また第十五紙と第十六紙との紙継ぎに無理がある。館の板塀の続きの線が引かれているが、線の性質が異なることが見て取れる。さらに絵巻の巻癖によって生じた横皺が連続しないところがある。一方紙の末尾に、建物の基壇の石列のような線が引かれている。立派な堂塔の基壇としか思われない。第二巻の冒頭の宮殿の門の基壇などではないかということもある。<sup>9)</sup> このように注意してもう一度振り返って見ると、この第一巻は随所に不自然な箇所がある。これまで指摘されてきたところでは、まず第九紙と第十紙の紙継ぎ部分、第十二紙と第十三紙の紙継ぎ部分、そして最後の第十六紙である。まず確認すべきは、この第十六紙は必ずしもここになければならないという画面ではないということである。しかも不自然に書き込んだと見られる線があり、当初からこのような情景があったとは思われない。すると様々な見解がこれまで提出されてきた。そこで、紙継ぎの不自然な第九紙と第十紙の間に挿入するという案である。<sup>10)</sup> 第

十六紙をこの間に入れると土坡の線も、崖の線もぴたりとつながるといえるのである。<sup>11)</sup> しかし物語の展開のテンポから見ると、ここに取って間を入れる必要はない。むしろ修理時における裁ち切りを考慮すれば、この書き継ぎの間をやや離して見れば、十分接続することが判明し、<sup>12)</sup> 紙質や山中にまかれた紅葉の有無などからして、仮に紙継ぎとしてつながるとしても、制作当初における変更と見るべきとされる。むしろ作者が描写の速度を速め、構図の変更を行った結果であるとした。そうすると第十六紙はいったどこに位置すればよいのであろうか。さらに復元案として、<sup>13)</sup> 先述した第十二紙と第十三紙の間にいれる案がある。確かにこの間の紙継ぎも横皺や紙の質や刷いた空の霞の藍の調子にやや異質なものを感ずるが、ここへ第十六紙を挿入すると、第十二紙との紙の横皺が連続するという。しかし信貴山を飛び立った米俵が再び山の上を越すというのはやや冗長ではないであろうか。なぜなら巻首からの描写では、長者の館からは水辺を越え、すぐに信貴山の山中に入っており、館と信貴山との間には、山稜は一つだけである。よってここに第十六紙を挿入すると、館と信貴山との間に、山塊が二つということにもなり、物語の展開のテンポを考えると、間延びすることは明白である。これも当初の作者による全体構成を見渡した時の構図の変更とみてよいのではないだろうか。巻末に本来画稿的なものであった第十六紙がなくなれば、そのために板塀の線も補筆されたので、本来は必ずしも必要でないもので、一気に説話場面が連続して進むように改変されたのではないだろうか。そのため途中で詞書を入れるべき箇所を失ってしまったのではないだろうか。本来であれば、山崎長者の巻の後

半にあたる詞書は第九紙と第十紙の間に入れるべきであったのが、現在第二卷の冒頭にあり、しかも第二卷の延喜加持の巻の詞に連続している。第二卷冒頭の詞書の第一紙の紙を験すれば、どうみても当初からの連続であることは間違いない。第一卷山崎長者の巻の後半部に該当する詞、わずか六行分が、第二卷の冒頭にあつて、しかも第二卷延喜加持の巻の詞に接続していることについては、作者の意図と考える他はない。今はない第一卷前半にあたる、冒頭にくるはずの詞書は本来あつたのか、最初から省略されていたのかは定かではない。ただ、現在の巻頭の紙質を見ると、激しい痛みや、横皺の多さ、顔料の剥落の度合いなどからして、開閉時における損傷による遺失だとしても不自然ではない。絵巻の常として、巻頭部分の損傷は著しく、巻を進めるほどに痛みが少なくなるのはしばしば経験するところである。しかし期せずして起こつたと考えられる冒頭の詞書の損失がかえつて劇的な効果を生んだとしたら、作者としては望外のものとするべきであろう。いきなり見る者をして、劇中に引きずり込む手法は映画ではよくあることを現代の人は知っている。すぐに物語が始まつてしばらくして、やおらタイトルやキャストの字幕がでる。場合によってはキャストの名前は幕引きの後で字幕が流れるのみである。観客はその頃にはすでに席を立ち始める。要するにくだくだしい説明はどうでもよいのである。連続した場面が織りなす一瞬一瞬の興奮にこそ、優れた絵巻を、繰り延べながら（見応えある映画を）視覚的に鑑賞する人のなよりの醍醐味なのである。

## 二、延喜加持の巻

第二卷は「延喜加持巻」と外題があり、先述したとおり、巻頭の二紙には第一卷山崎長者の巻後半の詞と第二卷延喜加持の巻の前半の詞とが続いて記されている。山崎長者の巻が激震の中に始まつたのに対し、延喜加持の巻は静かに動き始め、やがてクライマックスを迎え、また厳かな雰囲気の中にことは無事終了する。一つには舞台が宮中で、醍醐天皇の病氣平癒を祈るところからことが起こっているため、命運はむしろ効験ある高僧という立場である。あまり下世話な場面は忌諱されるであろう。よつて場面は淡々と進む。第二卷延喜加持の巻を紐解いて見てゆくことにしよう。詞書が終わると、隨身、従者を伴つて歩む勅使の一行がいる。延喜の帝の病氣平癒を祈つて、様々な祈禱や読経がなされたが、一向に効き目がなく、詞書によれば大和国（河内国）信貴山（信）の聖は効験があつて、鉢を飛ばして物事を行うほどである。召し出して祈らせてはと。そこで藏人を勅使として使いに遣すこととなつた。今まさにその藏人の一行が宮中から信貴山に向かうところである。藏人は緋（した）の下襲（かきね）を着け、青色の闕腋の袍を着る。頭には、細纓（ほそえい）の冠（かぶ）の左右には綾（おいかげ）を着けた六位の武官である。勅使は厳かに尺をとり、道の中央に一段高くなつた通路を歩む。これは置道とよばれるもので、高位の者のみが行通ることができる。細纓の冠を着けた隨身以下四名の従者を伴っている。顔を引目鉤鼻に表した高貴な身分の勅使と、軽快な筆致でその表情を描いた従者達とは、面貌の表現にも大きな相違がある。次位の隨身は置道の北側（北路）を通り、さらに下位の者は置道の南

側（南路）を通ることが定められていたとされる。絵巻は当時の作法を踏まえていることが分かる。やがて朱塗りの大きな門を出でんとする。内裏には大きな門があり、さらに宮城を出るにはもつと大きな門を出ねばならないが、まず内裏の正門である承明門、次いで建礼門をでて、宮城の大門をでることになるが、東門にあたる待賢門ないしは陽明門とされる。立派な石積基壇をもつ五間三戸の門で、鴟尾の上がった瓦葺きである。門の左右には瓦葺きの築地が続いている。当時、内裏への出入りには東面中央の待賢門か、その北にある陽明門を通ったとされる。当時の記録には左兵衛陣の北門（陽明門）の東に二本の大樹があったと記されており、絵巻では門の内側に二本の樹の幹が見える。また先述した「扶桑略記」の歴史的記述では命蓮は宮中の左兵衛陣に召されたことになっており、関連が分かりやすい。よってこの門は陽明門ではないかと推測される。門の中央三間の扉のうち、中央は天皇しか通することはできず、南北の両間から出入りすることになる。勅使は門の南間を通過して、大和国信貴山へと向かうので、外に出てから右（南）へと曲がっている。そして、門の外の水路に架かった朱塗りの高欄の付いた橋を渡って比叡山の高僧が加持祈祷や御読経に召され、門の北間からあわただしく内裏へ参内する姿がある。門外には高僧の乗ってきた牛車が止まっている。なぜか分からないが、牛車の御者達が腕や首筋をぼりぼり痒そうに搔いているのはいかがしたのか。朱の飾りで威儀を整えた白馬と栗毛の馬に乗って、一行は右折、すなわち南、大和へと向かった。築地塀の続く京内では、やんごとなき高僧の陸続と続く内裏への出入りに、様々な噂を伝える庶民の口コミがあった。

一旦場面は京を離れ、霞の彼方に大和国信貴山の登りにかかる勅使の姿を追う。史実に従えば八月十九日、頃はすでに秋である。紅葉に染まった信貴山の山路を行く一行の姿が見え隠れする。やがてこれまで何回も繰り返された命蓮の住房が現れる。場面はズームインして、すでに到着した勅使は、必死に前屈みになってことの次第を告げ、帝の病氣平癒のための加持祈祷を懇請する。従者の一行も神妙な面持ちで庭に控える。一方命蓮はなにかとぼけたような表情で応対している。第一巻の山崎長者の巻の騒然とした画面とは、同じ所とは思えないくらい沈んだ雰囲気がある。そのせいか紅葉がはらはらと地上に散っているのも妙に目につく。場面はのどかな信貴山の場面からズームアウトし、霞を隔てて、一転して宮中奥深く清涼殿の東南の弘庇の庭、勅使の報告が奏上される場面へと転換する。階の下には先ほどの勅使が命蓮の返事を報告する。先の隨身も河竹の台の傍に控える。殿上では降ろされた御簾の前に、公卿の正装である縫腋の束帯姿の二人が垂纓の冠を着け、下襲の裾を長く引いて振り向き、勅使の報告を聞いている。また左隅にはゆったりとした直衣姿の公卿が朱の扇をもって静かに耳を傾ける。くつろいだ服装で、より高位の公卿と察せられる。当時の大臣、大納言、中納言といった最高位の公卿であろう。さすれば当時の左大臣は藤原忠平、右大臣は藤原定方である。勅使は畏まって奏上する。つまり、命蓮は宮中へは来ず、信貴山にて加持を行うという。そして祈りが終わったら、劔を編んで衣にした劔の護法という者を遣し、帝の夢にも、まぼろしにも御覧になったらお知らせください。それが祈祷の証ですという。



後半は「さて三日ばかりありて・・」という詞書に始まる。遂に帝のまどろみに夢のなかに、きらきらする劍の護法童子が現れ、帝の病は快方にむかったのである。場面は再び宮中清涼殿弘庇の間、そこには時に備え、帝の傍に仕える宿直の公卿が侍っていた。じつと御簾の向こうに神経を集中している公卿の後姿が緊張感に張りつめている。しかし静かな時間の流れる中、ふっと帝がまどろまれた時、さっと一陣の風と共に劍を肩から何本も下げ、右手には劍を、左手には羂索を執った、童子が輪宝に乗って飛来した。信貴山から一気に飛来し、清涼殿で急停止した、その速度感を飛雲の渦巻きで表し、その先は御簾の手前に到達している。帝と伺候した公卿の他には誰もいない昼頃の出来事であった。帝は快方に向かわれたことは云うまでもない。場面を先に追ってゆくと、そこには空中を左上方から、護法童子が輪宝を転がして身に着けた沢山の劍の擦れ合う音もかまわず、手に持つ劍を突き立て、羂索を風に煽られて韋駄天走りに駆ける童子の姿があった。雲は逆巻き、先へ先へと童子を急き立てる。また雲の尾は一直線に信貴山からの飛来を描く。劍の護法童子の姿は身に着けた劍を除くと、ほぼ不動明王の姿である。このような劍の衣を着けた尊像が図像としてはほとんど知られてないが、やや近いものとして「毘沙門天二十八使者図像」がある。上空から下界を見ると小さく村の草を摘む風景が、また遠くには雁が飛び立つ秋の景色が見え、やがてフェードアウトして場面は霞の彼方に消えてゆく。

場面は再び信貴山に向かう勅使の一行が登場する。今度は帝の病氣平癒の御札にと向かう晴れやかなお使いである。先頭の白馬も足

取りが軽い。やがて紅葉の真つ盛りの信貴山の山に入り、一山を越え、また命蓮の住房に至る。命蓮と間近に対座した勅使も今度は得々と帝の回復の様とお礼言上を申し述べ、命蓮の効験を称える。庭先にいる従者達も効験あらたかな命蓮の姿を尊敬の念をもって見守る。しかし命蓮は帝からの僧正、僧都の僧位、僧官の授与の話にも、また莊園寺領の寄進の話にも固く辞退するばかりであった。命蓮の傍らの朱塗りの経机には数本の経巻がおりてあり、これを法華経とすれば、山林における法華経行者としての命蓮の面目躍如といったところであろう。

この第二巻延喜加持の巻においては、特に絵巻としての料紙の錯簡とか、不自然な箇所はない。むしろ極めて精密な内裏の景観描写が注目される。ことに二回描かれる清涼殿の場面は、建物の正確さばかりでなく、登場する公卿達の服飾、身分作法にも極めてよく精通したものと指摘されている。平安時代の有職故実（ゆうしやくこじつ）に対応する詳しい知識をもった絵師や、あるいはそれらが重要な意味を持つ注文主なりの意向が反映する環境を考慮する必要がある。清涼殿の中庭の手前に黒い突起状のものが見えるが、これは清涼殿の中庭をはさみである仁寿殿の屋根の先ではあろうという説と、火炬屋（ひたきや）の頂部とみる説などがある。平安時代末期に後白河院の命で、藤原光長らが描いたとされる「年中行事絵巻」から推定される。そこまで内裏の構造を理解できた絵師はいかなる身分、階層の絵師であったのであろうか。

### 三、尼公の巻

第三巻「尼公の巻」は三巻の中で最も長い。しかし最も静謐で、情愛と安寧な気分を満たした絵巻である。冒頭の詞書は「かかるほどに、しなのには姉ぞ一人ありける。」と始まる。つまり命蓮の出身が信濃であることが初めて知られ、姉がいたことを伝える。しかし最も近いとされた説話集である「古本説話集」にも、「宇治拾遺物語」にも信濃ということとは出てこない。両説話集では説話の冒頭に「今は昔、信濃の国に、法師ありけり。」として命蓮の出自を語る。本絵巻には第一巻の巻首に詞書が現存しない。現状の絵巻に関して云えば、ここで初めて「信濃」ということが示される。当初の絵巻の第一巻の冒頭に本当に詞書があつて、そこには「信濃」という地名があり、ここで再び繰り返されたのか、それとも制作変更を経て、最初の詞書はなくて、第三巻尼公の巻で初めて「信濃」という地名がしめされたのである。信濃を旅立ち、長い道中の道行きこそが、姉と弟との久方ぶりの再会への欠かすことのできない絵になる道程である。やはりここで都や南都からは遙かに遠い長い旅路を暗示させる必要があつたのではないか。もし、両者の出身が畿内近くの河内や、伊勢や近江では、見せる場面も限られる。やはり善光寺という仏縁を誰もが思い至る信濃という場面設定が欠かせないのでないか。仮に一卷の冒頭に詞書があつたとしても、「信濃」という地名をここに記すことは最も効果的である。重要な場面設定に関わることなのに他の説話集では案外無頓着である。巻頭は信濃国からの出立である。木曾路の険しい山と溪谷の間をぬって、蓑傘を着けた馬

引きに手綱を執らせ、黒馬に乗る姉の尼公が、後から杖をついて蓑傘を着けた従者を伴い、大和国東大寺を目指す。なぜなら弟の命蓮は東大寺で受戒するといつてたまま、以来便りがなく、すでに二十年がたっている。尼公は剃髪し、白の浄衣を着、頭には市女笠いちめがさを被る。やがて木曾川は川幅を増し、大きな清流となつて平野に注ぐ。夕暮れになつて人里に着いた一行はとある村の館に宿を借りた。木戸から中庭に入った一行は馬から鞍を降ろすまでもなく、館の人々の接待を受ける。網代塀のある藁屋根の住まいから湯気の上がる粥を入れた土鍋や果物など心づくしの品が運ばれる。もうすでに夕方遅く、燭に火を灯しての歓待である。尼公一行は庭をはさんだ堂にての宿となる。黒漆塗りの須弥壇が見えるので、仏堂のようである。村の持仏堂であろうか。荷物を縁に降ろし、沓を脱いでようやくほつとした瞬間である。さすがに高齢の尼公の額や頬には皺が刻まれる。幾日かをこのように旅し、さらに歩行にて進むほどに、とある村にたどり着いた。村はずれの道ばたの大樹の元には小さな祠があり、小さいながらも立派な朱塗りの祠で、奉幣や供物も供えられており、都近くの村を想像させる。村に入って村の長老に命蓮のことを尋ねる。杖をついた老人が村の老婆や若い乳飲み子を抱えた女とともに、戸口から出て応対する。杖をもつ尼公と腰の曲がった老人との応対の様はいかにもユーモラスである。なにやらとんちんかんな対話のようである。それもそのはずで、二十年前にここを通つて南都東大寺に登った人のことなど覚えていない人はいないはずもない。次々と行く先々の村で命蓮のことを尋ねた。洗濯の手を止めたり、畑仕事を中断して、また糸紬をしながら、尼公の尋ねにみんな

な親切に対応している。子供達や犬までもが珍しいお客に興味を見せる。やがて南都に向かい、鹿の鳴く奈良阪越えにさしかかった。いよいよ東大寺も目前である。場面は奈良阪の峠を越えて見渡した時、霞の先に東大寺の巨大な大仏殿が突然目の前に現れた情景を描いている。朱塗りの柱、高い階の石段、金の鍔金具を打ち付けた大きな扉。隙間からは四天王の中の広目天や、脇侍の観音の足と台座が窺われる。正面にまわると大きな光背を背に、大きな蓮弁の台座に坐した大仏様がおわします。皆金色の毘盧舎那仏は雄々しく、天平創建当時の姿をとどめ、大仏殿も治承の兵火に焼ける前の様子を窺わせる。階の手前には現在も残る灯籠が描かれている。尼公は必死に祈った。殿内には参籠する尼公の姿がひときわ小さく四体に描かれる。異時同図法といい、一人の人が次々に継起する事柄を順次に一画面に描き込む方法で、日本の説話画にしばしば用いられる巧みな構成法である。尼公は祈り、まどろみ、やがて夢に大仏のお告げを頂いた。「これよりにしのかたに、みなみによりて、ひつじさるのかたに、やまあり」。夜の明けるのを待つて、尼公は悦び勇んで、南西の方へと歩むのであった。東大寺大仏殿の巨大さに比べて、小さかった尼公が、さらに次第に小さくなって、信貴山へと急ぐ。途中の背景を一切省略した藍で染めた霞の中の道行きは、尼公のはやる心理を見事に表現した劇的な手法である。能楽や歌舞伎の橋懸や花道での道行演出にも通ずるこのような場面展開は、この絵巻の絵師が演劇的な要素を十分に考慮していることを知らしめる。紫雲たなびく信貴の山は雁の飛び立つ向こうに見える。

ここで、後半の詞書が挿入される。しかも三紙にわたり、長々と

続く。折角盛り上がった気分には水を差すようで、将に能楽でいうところの間狂言が、命蓮と尼公との再会を逐一説明する。すでに予想される結果は分かっている観客をして、しばらく待たせるといふ心にくいやり方といえる。場面は信貴山の山の中、何度も見たあの命蓮の住房である。命蓮は読経の最中であつたとみえ、庭先に聞こえた声に、巻子を持ったまま、戸を開けてのぞいた。一方の端には恐る恐る尋ねる尼公がいる。再会の瞬間はこうして静寂の中にほのぼのとしてあつた。場面は急展開し、悦びの再会と、その後の二人の山中での日々が将に異時同図法でもって描かれる。クライマックスの場面描写にはこの絵師の渾身の力量が窺われる。命蓮の住房は今まで見てきたものより大きく立派になり、懸崖に舞台を張り出して、高欄が巡り、阿伽棚が設けられている。なかでは再会時にまず信濃より携えてきた衾（ふと）という衣を渡し、これまでの労苦をねぎらつた。そして阿伽棚で仏華を捧げ、共に經典を読み、ついに信濃には帰ることはなかつたという。山中にはあの山崎の長者の飛倉がその瓦屋根をみせており、霞の向こうには谷を隔てて山が続いており、山深い信貴山の景でもってこの絵巻は静かに終わっている。詞書の最後には毘沙門天に關することがさりげなく記されているが、特に命蓮と毘沙門天とを結びつけることはない。絵巻には何一つ信貴山の毘沙門天は描かれることはなかつた。これまた不思議なことで、後世には信貴山は毘沙門天の霊場として多くの信仰を集めたが、この当時は未だ萌芽的な時期であつたのであろうか、それとも描いた絵師が毘沙門天の存在を十分に認識していなかつたのだろうか。

## まとめ

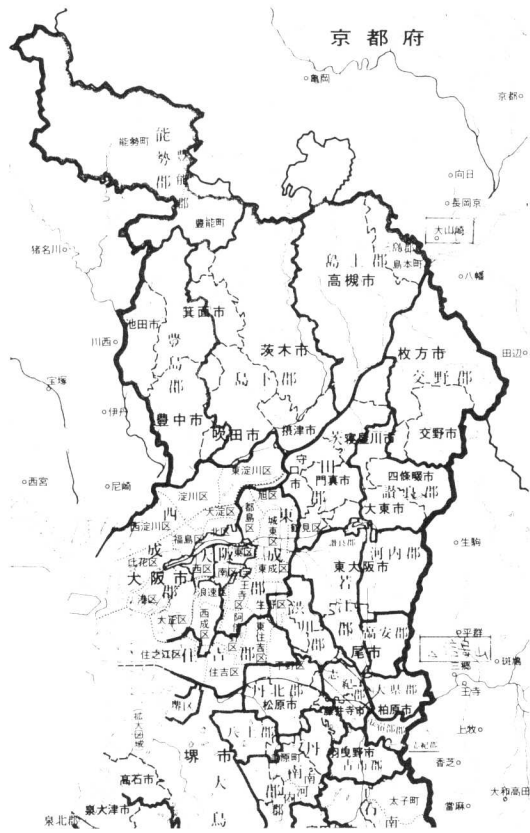
さて、後世見るような信貴山朝護孫子寺の草創の縁起でもなく、また命蓮の高僧伝でもない、この絵巻は一体どのような絵師の手になり、どのような環境で制作されたのであろうか。これまで様々な説が提出されたが、いずれも未だ十分には説得的ではない。<sup>17</sup> 院政期の鳥羽僧正覚猷に求めるもの。江戸時代中期以降の説であるが、根強い支持がある。<sup>18</sup> またその制作環境をめぐって、その仏教的背景としての要素を抽出するなかでの議論もあった。天台系山林修験行者としての命蓮と、一方南都東大寺との関わり、また白描図像の集積のさかんであった院政期の教団など、多くの問題を提起した。<sup>19</sup> しかしこの絵巻そのものからは断定するほどの確かな決め手はない。なにより絵画様式としての、大和絵の系譜から、そもそもその制作年代を追求する試みも当然行われた。<sup>20</sup> 従来から作絵、濃彩の源氏物語絵巻に対して、線描主体の信貴山縁起絵巻とされてきた。確かに第一巻の山崎長者の巻の冒頭部分を見ると、その激しく、躍動する線描の走りの見事さとの確さに圧倒される。しかし詳細に見てゆくと、その見解は相当修正する必要がある。肥瘦が強く、筆致の激しい線描による描写は決して白描画ではない。現状ではかなり剥落が著しいが、彩色顔料が確認される。現状の線描は下書線ではない。まず下書線をし、彩色し、描起を行う作絵の工程とは見えず、最初の線描を生かすために薄彩色にとどめた技法である。そのため彩色が剥落し、今は線描のみが躍動して見える。しかし当初は薄彩色の下に線描がのぞかれる表現であった。また例えば第二巻の延喜

加持の巻では勅使や公卿達は明らかに引目鉤鼻の作絵に近い技法で表されている。下書線もあり、また描起線とのずれも見出される。一方身分の低い下男下女や命蓮のような僧侶はひどく荒々しい殴り書きのような描写である。つまりこの絵巻の絵師は両方の技法に精通していたとみるべきである。すでに指摘されているように、奈良時代の唐朝絵画の導入から、すでに三百年あまりを経て、平安時代後期には巧みな線描で人物の動きや日本的な山水を表現する、いわゆる大和絵の表現力が確立していた。<sup>21</sup> 平等院鳳凰堂（天喜元年一〇五三）の山水描写や押縁の人物描写、また東寺の山水屏風の描写、高野山の応徳涅槃図（一〇八六）の山水表現に類似の傾向が指摘されている。またそれが濃彩作絵の平安時代様式から線描主体の鎌倉様式への変化ということでもない。内裏の状況や有職故実にこだわりの見える絵師の高度な技法を会得した結果といえるべきかもしれない。とすればこの絵師の制作環境はかなり限定されたものとなる。宮廷の絵所を中心として活躍し、また南都北嶺の大寺院の絵画制作にも関わることできた当代一流の絵師と見るべきであろう。では結論として一体制作されたのはいつ頃かという問題である。少なくとも近世に至るまで、この絵巻が信貴山朝護孫子寺で制作され、寺に伝来したという記録はない。また十二世紀に入ると、宮廷では先の源氏物語絵巻などの絵巻制作が盛んとなり、男絵、女絵として競って物語絵を制作、鑑賞し、絵合が流行した。ことに後白河院は「年中行事絵巻」を制作させ、多くの絵巻などを蓮華王院宝蔵に集めたという。年中行事絵巻の描く内裏や儀式作法の正確さが信貴山縁起絵巻との類似点として指摘されているが、この時の内裏は保元

二年（一一五七）に新に造営された内裏であるとされる。すなわちこの時の新造を記録すべく年中行事絵巻が作られたのではと思われる。また建築から見て、第二巻延喜加持の巻に見る東大寺大仏殿は治承四年（一一八〇）の平重衡の南都焼討以前の天平以来の大仏殿である。制作年代の上限、下限が絞り込まれたが、本絵巻の絵画様式から見て、先の十一世紀後半の作例に続く系譜にあり、十二世紀の絵巻物流行の時代背景から見て、十二世紀後半の制作と見て誤りないものと考えられる。ここで想起されるのは後白河院の長子、二条天皇が長寛三年（一一六五）六月、病気に伏し、間もなく天皇の位を二才の六条天皇に譲った時、平清盛が先例として醍醐天皇の時の信貴山命蓮を召しての加持祈祷をあげていることである。<sup>22</sup>二条院の病は結局快癒せず二三才の若さで崩御した。この時命蓮説話が再びクローズアップされ、歴史の真実と文学の桎梏から離れ、独自の飛躍を遂げ、信貴山縁起絵巻として再構成されて結実する重要な契機がここにあったのではないかと思われる。

## 註

- (1) 「信貴山資財寶物帳」大日本仏教全書 寺誌叢書三
- (2) 「扶桑略記」国史大系 第二十四 裏書 延長八年八月十九日の条
- (3) 「僧妙達蘇生注記」 続々群書類従 第十六
- (4) 「大日本国法華経験記」 卷中 「第八十七卷持経者明蓮法師」
- (5) 「今昔物語」 第十一
- (6) 藤田経世「信貴山縁起絵巻の詞について」(美術研究 一五一 昭和二十三年) 藤田経世・秋山光和『信貴山縁起絵巻』(昭和二十三年 東京大学出版会)
- 益田勝美「信貴山縁起の詞章」(『絵巻物全集二信貴山縁起』(昭和二十三年 角川書店) (『説話文学と絵巻』所収 昭和二十五年 三一書房)
- 中村義雄「絵巻物詞書の研究」(『信貴山縁起絵巻の詞書についての覚書』(昭和二十七年 角川書店)
- (7) 「河婆縛抄諸寺略記」信貴山 校刊美術史料 寺院編 上巻
- (8) 日本に現存する最古の写経である「金剛場陀羅尼経」は、教化僧宝林の勸進によって、川内国志貴評の知識たちが結縁して書写された、いわゆる知識経である。書写されたのは西戌年五月で、天武天皇十五年(六八六)に当たるとされる。「法隆寺一切経」の墨印があつて、法隆寺に伝来したことがわかる。このように、川内国志貴評(郡)は仏教文化の先迫地として、また法隆寺とも深い文化的・地理的關係にあつたことが推測される。
- (9) 藤田経世・秋山光和「信貴山縁起絵巻」(昭和二十二年 東京大学出版会) 秋山光和「復元の問題」
- (10) 福井利吉郎「『信貴山縁起』の模本類と二、三の問題―復元を中心として―」(文化 二ノ八・九 昭和二十一年)
- (11) 上野直昭「信貴山縁起について」(畫説 三〇 昭和二十四年)
- (12) 亀田孜「信貴山縁起絵巻修理改装の記」(文化 二ノ八・九 昭和二十一年)
- (13) 小松茂美「信貴山縁起」(日本の絵巻 四 昭和二十二年 中央公論社)
- (14) 近年「延喜加持巻」詞書の中の「やまと」は実は「かうち」の文字を後世に補筆訂正したものであるとする新知見が発表された。笠嶋忠幸「信貴山縁起絵巻」についての新知見―詞書に記された「やまと」の再検討―(『国華』一一九〇 平成七年)。それによれば信貴山の所在を河内国と見る立場、すなわち京都の宮廷側の制作になったとし、後世絵巻が信貴山に移った後、大和国と自己認識する信貴山の立場で改変されたということになる。
- (15) 『毘沙門天二十八使者図像』(仁和寺) (大正大藏経図像第七) 佐和隆研「信貴山縁起」(日本絵巻大成四 昭和五十二年 中央公論社) それによれば説法使者といい、飛行自在の仙術を有するという。しかしその姿は僧形で、鎧を身につけ、鬚をたくわえたもので、童子形ではない。



参考地図

- (16) 福山敏男「建築」(『信貴山縁起』新修絵巻物全集 三 所収 昭和五十一年 角川書店)
- 日野西資孝「信貴山縁起にあらわれた風俗」(『信貴山縁起』新修絵巻物全集 三 所収 昭和五十一年 角川書店)
- 鈴木敬三「信貴山縁起絵巻に現れた風俗」(美術研究 一五九 昭和二十六年)
- 「風俗から見た信貴山縁起絵巻周辺」(仏教芸術 二七 昭和三十三年)
- (17) 信貴山縁起絵巻の研究史に關しては
- 笠井昌昭「信貴山縁起絵巻の研究」(昭和四六年 平楽寺書房) に詳しい。
- (18) 笠井昌昭「信貴山縁起絵巻の研究」(昭和四六年 平楽寺書房)
- 佐和隆研「信貴山縁起」(日本絵巻大成 四 昭和五二年 中央公論社)
- (19) 大串純夫「信貴山縁起絵巻の成立をめぐる歴史的諸条件」(美術研究 一七七 昭和二十九年)
- 源豊宗「信貴山縁起絵巻の南都的作風」(美学論究 一 昭和三十六年)
- (20) 秋山光和「信貴山縁起絵巻の様式的系譜」(仏教芸術 二八 昭和三十一年)

- (21) 秋山光和「問題のありか」(『絵画史のながれのなかで』(『信貴山縁起絵巻』所収 昭和三十三年 東京大学出版会)
- (22) 『山槐記』(増補史料大成) 長寛三年六月二十八日の条

「廿八日乙巳 或人日、新院御惱猶不輕、今日石屋聖人密參入奉灸御胸三所、各廿一草、相模守信保奉灸□□聖人療轉屍病云々、自平中納言被擧云々、□□天皇獲麟之時、召信貴山命蓮聖人、令□□院崩給之時、召三瀧聖人、雖有先蹤、至于醫療□□不可<sup>・</sup>者也、」

百橋明穂 (どのはし・あきお)  
 一九四八年 富山県生れ  
 一九七一年 東京大学文学部卒業  
 一九七四年 東京大学大学院修士課程修了  
 一九七四年 奈良国立文化財研究所  
 一九八〇年 奈良国立博物館  
 一九八一年 神戸大学文学部  
 (専門) 日本・東洋美術史